



活性委員会より

地区活性委員長

鈴木 宏

(宇都宮北RC)

新春のお慶び申し上げます。新しい年が時を刻み始め、ロータリー年度も後半に入った訳ですが、昨年11月5日(日)に次年度クラブ会長・村上肇地区活性諮問委員・近藤隆亮DGE・今年度および次年度ガバナー補佐の方々と共に地区活性委員会を開催いたしました。協議事項は、クラブ細則の見直しとCLPでした。また、11月25日(土)岡山で開催されましたロータリー研究会CLP分科会でのパネリストとして村上肇PDGが発表され、特別発言者として私が参加いたしました。その報告をさせていただきます。

「CLPは劇薬となりうる。」CLP分科会の後、他地区のガバナーから失敗したクラブの例をお聞きしました。それは何故か。クラブにて「ロータリー運動」について考えずに、組織構成のみの改正だけをした。これが原因となっているところが多く見られました。

ロータリーの目的は、唯一「Object of Rotary (綱領)」の推進です。そして、次年度のクラブ会長は、クラブ細則を見直し、委員会構成を考えていく訳です。その一つの手段として、CLPという考え方があることをRIは情報媒体機関として2004年11月に「推奨クラブ細則」の改正として提示したのです。この「推奨クラブ細則」では、委員会構成を各クラブが考えることになっています。このまま一字一句採用するわけにはいきません。各クラブがクラブ細則を見直す時考えるわけです。

CLPは、私なりに解釈しますと、「CLPという変化を脅威ではなくチャンスと捉え、組織の基本(組織の使命・価値・成果)に係わることにについては、継続性を確立し、変化と継続の調和を必要とすることを理解し、クラブの自主性を尊重して、創立年数・会員数・地域差に係わらず、身の丈にあったクラブ運営と組織作りを基本として、ロータリー運動を理解し、前向きに取り組もう」ということではないかと思っております。従来のように形が固定されたものではなく、「ああした方が良い、いやこれは違う」とクラブ内で話し合っ、形を変えていき、そして、どのクラブにも無い「自分たちのクラブ」を作っていくこと、これがクラブの活性化に繋がっていくのではないかと理解しております。

また「効果的クラブの4つの要素」というのがあります。国際ロータリーの側から個々のロータリー・クラブを具体的に評価しようとした場合、ロータリー理念や哲学の理解レベルや思いやりの心の程度を客観的に評価することは出来ません。会員数の増減・財団への寄付額・具体的奉仕活動の対象や金額・地区やRIに貢献している人間の数などは明確に把握し評価することが可能です。そこでクラブの実情をいわゆる成果主義的にRI側から評価するための視点として登場したものと考えられます。ですから

ロータリー・クラブ存在の根本を根底から改めようと言うものでは元来ありません。その意味では「四大奉仕というロータリーの基本が葬られてしまった」などと騒ぐのは見当はずれなことだと言わなければならないでしょう。常任委員会に四大奉仕を入れるかどうかは各クラブの自由です。

ロータリーの目的は「思いやる心」を育成し、ロータリー・クラブの奉仕はロータリーの目的ではなくロータリアンを訓練する手段です。「思いやる」とは「親身になる」・「友情溢れる関係を作る」とことと思います。そしてコミュニティ・サービスとは「社会奉仕」の訳ではなく「良き市民たれ」と言うのが本筋です。判りやすくいえば自分の住んでいる街に対して、また 商売においても「親身になる」とことと思います。そして、一緒に励ましあい教えあう中から「親身になることの 喜びを味わえる人々の和」を広げていくこと、これがロータリー運動の中核を為すものではないかと思えます。ロータリー・クラブとは規模の大きさを誇るものでもなく小さいことを恥じることでもありません。ロータリー・クラブとは、その地域の中でどれだけの存在感を示せるのか、見える奉仕活動ではなく、地域社会に親身になり「良き市民」として人としての巨木たるロータリアンを如何に育てることが出来るか、それがロータリー・クラブだと思います。そのためにもCLPを機会にクラブの在り方をお考えいただけたら「クラブの活性」は十二分に為されるのではないかと思えます。

こんなジョークが巷に溢れております。沈没する船の船長が中々海に飛び込まない日本人に言いました「みんな飛び込みましたよ」日本人は全員慌てて飛び込んでしまうようです。CLPの採用は、各クラブで熟慮して採用を考えてください。そして「CLPは劇薬となりうる」このことを肝に銘じていただければと思います。

